

「2005国際クラリネット・フェストTAMA東京」で その伝統と革新を再認識させた「ルブラン」

先月号でもお知らせしたとおり、世界の名手が一堂に会して開催された「2005国際クラリネットフェストTAMA東京」(7月18日〜24日/パルテノン多摩、他)、今回はフランス伝統の名器ルブランを愛用するトップ・プレイヤーたちのコンサートの模様をご紹介しよう。



▲圧倒的なテクニックとレパートリーの広さでは他の追随を許さないエディ・ダニエルズ氏。愛器はルブラン「コンチェルトII」



▲左からコムス、デロシュ、ダニエルズ、キューベールの各氏による超豪華な四重奏が楽しめるのもフェストならではの

**E・ダニエルズ、L・コムス、
J・デロシュ
ルブラン」が誇る
超大物プレイヤー登場!**

フランスに生まれ、世界でも最も古い歴史を持つブランドのひとつとして知られ、数多くの愛用者がいるルブラン・クラリネット。7月20日、17時からパルテノン多摩・大ホールで開かれたこのコンサートには、そのルブランを吹く世界のビッグ・プレイヤーが続々登場し、大きな関心を集めた。

出演者は、アメリカから来日したシカゴ交響楽団首席奏者のラリー・コムス氏、演奏家および教育者としても活動を続ける一方、ルブラン社のスタッフとしての重責もこなしている女流奏者ジュリー・デロシュ氏、そしてクラシックからジャズまで多彩なジャンルで活躍するクラリネット&サクソックス奏者のエディ・ダニエルズ氏の

3人。この日はそれに加え、フランスからパリ・オペラ座管弦楽団首席奏者のフィリップ・キューベル氏も参加した。

この日は演奏に先立ち、国際クラリネット協会会長のマイケル・カルヴァン氏(ニューヨーク州イサカ大学音楽学教授)のあいさつがあり、その後華やかなステージへと移っていった。

最初はコムス氏とデロシュ氏のデュエット。観客はお祭りにふさわしいなごやいだ雰囲気、2人の登場を待ち、そこに自らもお客さんと共に演奏を楽しもうと笑顔で満面に浮かべた2人が大きな拍手に迎えられて登場。

2人はマッケイブの「2本のクラリネットのための『バガテル』」を、まるで友が語り合っているかのように親密なアンサンブルと、ルブランならではの輝かしい音で楽しませた。

そのサウンドは、たとえるなら甘いささやきから情熱的な告白まで変幻自在で、プレイヤーの力量とルブラン・クラリネットの包容力の大きさが聞きものだった。



▲ルブラン「オーバスII」を愛用するコムス氏とデロシュ氏による絶妙のデュオ

1ニヨ〜2本のクラリネットのためのデヴィエリテイメント」をオーケストラの伴奏で披露。このフェストならではの、めったにお目にかかれぬコンビの演奏ということとで観客も興味津々、名手同志のかけひきたつぶりの演奏を堪能できた。

最後はファン待望のコンビ、コムス氏とダニエルズ氏。アメリカのクラリネット界を代表する大御所2人の登場に、ファンから熱い拍手と声援が送られた。曲はメンドルスゾーンの「2本のクラリネットのためのコンツェルトシユトウツク第2番」。

リラックスした雰囲気ながら、それぞれが開発にもたさざわった愛器「コンチェルトII」(ダニエルズ氏)と「オーバスII」(コムス氏)を駆使してヴィルトゥオーゾ・クラリネットの神髄を見せつける演奏で、客席をどんとんロマンあふれる音楽の世界に引き込んでいくテクニクはさすが!

ルブラン・ルネサンスを 痛感させた2つのコンサート

20日のコンサートで、ルブランのプレイヤーたちの演奏に接し、もっと彼らの音楽やクラリネットの音を聞きたいという思いに駆られていたら、22日にその思いが達せられるコンサートが2つあることを知り、さっそく会場に駆けつけた。

最初は、野中貿易(株)が京王プラザホテル多摩「アポロの間」に設けた特設ブー



スで午後2時から開かれた「ルブラン・ミニコンサート」。ラリー・コムス氏とジュリー・デロシュ氏というあこがれのプレイヤーの演奏がライブ感覚で間近に聞けるとあつて、会場はすでに超満員。

演奏会はコムス氏の「おはようございます」というひと言(もちろん日本語!)で始まった。曲は、このフェスティバルのために、アンドレ・アンワイラーが書いた4つの楽章から成るクラリネット二重奏曲「Diversions」。2人が使用した楽器はルブランのオーバスIIで、奏者の意図するモダンな響きを忠実に表現する楽器の性能のよさも相まって、サロンでくつろぐかのようにゆつたりと演奏を楽しむことができた。

演奏後はサイン会で、もちろん大変な盛況だった。

もう一つは、同じ日の午後7時30分から大ホールで開かれた「フェスト・スペシャル・ジャズ・コンサート」の中の「クラリネット・ウィズ・ジャズ・オーケストラ」だった。このコンサートは肩肘張らずにお客さんも手拍子で楽しめるもので、まさにジャズのエッセンスをたっぷり味わうことができる趣向になっていた。そして、ルブ



▲ホテル内に特設されたルブラン社のブースでは、ミニ・コンサートやサイン会などが多彩に開かれ、ファンを楽しませた

LEBLANC NONAKA

ルブラン・クラリネット

ソナタ	B ^b
エスプリ	B ^b A
コンチェルトII	B ^b A
オーバスII	B ^b A

ランプレイヤーを代表して出演したのは、もちろんあの巨匠J・ジャズの名手エディ・ダニエルズ氏だ。

この日はP・ウィリアムズが彼のために書き下ろした「コンチェルト・イン・スイング」を演奏。たつぷり20分はかかる3楽章構成のコンチェルトで、彼を敬愛するジャズ・クラリネット奏者、谷口英治氏が指揮する16名のフル・バンドがサポートするという豪華な演出に大満足!とにかく文句なしに楽しめるコンサートで、客席ばかりではなく、出演者全員が大いにノって楽しんでた。

このように、フェストでのルブラン・クラリネット奏者の活躍ぶりには目を見張るものがあり、クラシックからジャズまで、ジャンルを越えてオールマイティにどんな音楽をも奏でるその性能の優越性と柔軟な表現力に、改めてルブランの魅力(伝統と技術力)を見せつけられた思いがした。